

1. はじめに

阿賀野市教育委員会（以下、市教委）では、今年度4月末～6月初めに市内百津地内の土橋北遺跡の発掘調査を実施しました。調査期間が約1か月と短期間であったため、発掘経過はご報告できませんでした。このたび、発掘調査が完了しましたので、調査の成果についてご報告します。なお、調査は、阿賀野市から委託された株式会社帆苺組が実施しました。

2. 発掘調査の概要

土橋北遺跡は、安野川左岸の東西400mに広がる縄文時代、近世（江戸時代）の遺跡です。県営湛水防除事業に伴い、平成26年度から市教委、（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施してきました。これまでの発掘調査の詳細は、阿賀野市ホームページの平成29・30年度「遺跡発掘調査だより」をご覧ください。

これまでの調査で、遺跡には上・中・下層の複数の生活面があることがわかりました。西側上層では、約400年前の江戸時代の百津村の一部が発見されました。中～下層では縄文時代後期と晩期の生活の跡が見つかりました。とくに、遺跡の東西では縄文時代の主体となる年代が異なります。西側は、縄文時代後期中葉（約3,500年前）、東側は縄文時代晩期後葉（約2,500年前）を主体とします。

今回は遺跡の東側について発掘調査を行いました。これまでの調査成果と同じように、遺跡には中・下層があり、それぞれ縄文時代晩期・後期の生活痕跡が見つかりました。たよりでは、中層で見つかった縄文時代晩期後葉の特徴的な遺構・遺物についてご紹介します。

3. マツリの場

今回の調査範囲では、西側に縄文時代晩期後葉の痕跡が集中します。約7mの範囲に、厚く炭が堆積する場所が発見されました。この炭を少しずつ取り除くと、地面が焼けた跡が複数見つかると、その周りからたくさんの土器が出土しました（第2図）。

土器は、1つがつぶれたもの（第3図）、わざと粉々に砕いたもの（第4図）、などいくつかのタイプが見られます。土器のほかに、縄文人が付けていたネックレスの一部（孔があけられた石製玉）や石を割る際に発生する剥片・破片がたくさん発見されています。



第1図 調査区近景（西から）



第2図 マツリの場のようす

つぎの時代である弥生時代前半（約 2,300 年前）、阿賀野市内では大きな壺の中に遺骨を入れる「再葬墓（さいそうぼ）」と呼ばれるお墓がたくさん作られます。このお墓に遺骨を入れるまでの間、弥生人は土器や石を粉々に割るマツリを何度も行っていたと考えられています。

中層で見つかった痕跡は、弥生時代に行われたマツリの跡ととてもよく似ています。今回の調査でお墓は見つかりませんでしたが、暗闇の中で火を焚いて土器や石を割るマツリをする縄文人のすがたが想像されます。



第3図 1個体の土器がつぶれて出土したようす



第4図 粉々に砕かれて出土した土器

4. クルミとトチの森

マツリの場の東側には小さな川が流れています。この川が約 2,500 年前に流れていたか、については検討が必要ですが、この川を埋めた土砂の中には、当時の遺跡周辺の自然環境を知るうえで重要なモノが含まれていました。

土砂の中には、大量の木と一緒にクルミやトチなどの木の实がたくさん含まれていました（第5図）。木の实のほかにも様々な種子が見つかっています。このことから、遺跡周辺はクルミやトチなど様々な樹木がうっそうと茂る森であったと考えられます。ところが、これらの木の实には、ネズミなど小動物による食害がほとんど見られません。もしかすると、実りの秋に何か大規模な災害が発生したのかもしれませんが。

森の脇からは、ぼつんと土器が発見されました。土器を土中に埋めた「埋設土器（まいせつどき）」と呼ばれるものです（第6図）。すぐ横には、木の实を加工する道具（石皿）、焼けた礫があります。土器の中には焼土粒・炭が多く含まれ、それらを取り除くと土器の底にへばりつくように「植物繊維の束」が敷かれています。

一般に埋設土器は、乳幼児・小児のお墓と考えられています。しかし、お墓と認定するための人骨の出土例がないこと、様々な形態の埋設土器が見られるなどの理由から、お墓だけでなく、多様な用途に用いられていたものと考えられています。

出土した埋設土器の発見された場所、底に敷かれた植物繊維の束は、埋設土器の用途解明にヒントを与えてくれる、とても貴重な資料になる可能性があります。



第5図 トチの出土状況



第6図 埋設土器 検出状況